

飯山市誌 「歴史編上」目次

口 統

刊行のことば 飯山市誌編纂委員長 小山邦武
監修にあたつて 東京大学名誉教授 寶月圭吾
文 学 博 士

第一編 原始・古代

あらまし

第一章 原始・古代の飯山	五
第一節 飯山のあけぼの	五
一 最古の石器文化	五
飯山のあけぼの 人類の登場	
雪の少ない旧石器時代 河岸段丘と旧石器時代遺跡	
旧石器時代は狩獵生活 イエヒムラ	
旧石器時代の道具 石器の製作	

二 飯山の旧石器時代石器群の移り変わり	一三
石器群の変遷を知る 日本最古の石器群	
三 縄文時代のくらし	三〇
縄文時代の遺跡と人口 各期の遺跡とその分布	

後期旧石器文化のはじまり ナイフ形石器の出現
ナイフ形石器の製作 檜先形尖頭器の出現
細石刃の出現 木葉形尖頭器石器群の登場
主要石材の移り変わり

第二節 土器を使いはじめた人びと

一 土器の出現

旧石器時代から縄文時代へ 土器の出現

石器の変化 生活環境

二 縄文式土器の移り変わり

縄文式土器の編年 草創期の土器 早期の土器

前期の土器 中期の土器 後期の土器

晩期の土器

三 縄文時代のくらし

縄文時代の遺跡と人口 各期の遺跡とその分布

縄文時代の住居 縄文時代の食と生業
千曲川と漁撈遺跡 まつりととむらい

信仰と祭祀

第三節 稲作のはじまり

三七

- 一 稲作文化の波及と定着 三七

　　弥生文化の誕生 稲作文化の定着

　　稻作文化の発展

- 二 弥生式土器の移り変わり 四一

　　弥生式土器の編年

- 三 稲作のくらし 四五

　　人びとのくらし 集落と水田 ムラのくらし

　　弥生時代の墓制

第四節 古墳造りと村

五一

- 一 古墳の造営 五

　　古墳時代の幕開け 古墳の形態と変遷

　　飯山の古墳

- 二 土器の移り変わり 五五

　　土師器と須恵器 前期の土器 中期の土器

　　後期の土器

- 三 人びとのくらし 五七

　　農業技術の発達 住居と集落 生産の道具

第五節 古代のくらし

六〇

- 一 集落の発達 六〇

　　飯山の奈良・平安時代 千曲川沿岸の遺跡

　　外様平周辺の遺跡 山間地の遺跡

- 二 くらしと生業 六二

　　住居 平安時代の墓制 鎌冶炉跡

第二章 市内の遺跡と遺物

第一節 旧石器時代

六六

第二節 縄文時代

太子林遺跡 新堤遺跡 トトノ池南遺跡
日焼遺跡 上野遺跡 関沢遺跡

第三節 古墳造りと村

六六

- 一 草創期・早期 八五

　　小佐原遺跡 北竜湖遺跡

　　新堤・トトノ池南遺跡

- 二 前 期 九一

　　田草川尻遺跡 有尾遺跡 大倉崎遺跡

- 三 中 期 一〇三

深沢遺跡 上の原遺跡 須多ヶ峯遺跡
中山遺跡 中町郷谷遺跡 宮中遺跡

小佐原遺跡 岡峯遺跡 上野遺跡

四後期 一一七

東原遺跡 宮中遺跡

五晚期 一二三

山ノ神遺跡

第三節 弥生時代 一二七

押出遺跡 上野遺跡 照丘遺跡 鍛治田遺跡

小佐原（城端）遺跡 東長峰遺跡 柳町遺跡

田草川尻遺跡 須多ヶ峯遺跡 小泉遺跡群

第四節 古墳時代 一五一

一古墳 一五一

勘介山古墳 有尾古墳群 法伝寺二号古墳

大塚・照里古墳群 上野古墳 向峰古墳群

二集落遺跡 一五五

柳町遺跡 上野遺跡 須多ヶ峯遺跡

有尾遺跡 田草川尻遺跡

第五節 奈良・平安時代 一六六

屋株遺跡 北原遺跡 鍛治田遺跡

第三章 律令制の時代 一八〇

第一節 律令政治の展開 一八〇

一大和政権の支配 一八〇

初期の大和政権 信濃の御名代と部民

信濃の国造

二 大化革新とその前後 一八一

推古天皇の政治 大化の革新 天武天皇の治政

三 律令制と地方行政 一八二

律令国家の統治組織 村落の制と班田収授

地方行政 律令の租税制度

第二節 越への交通 一八七

一 越地方の開拓 一八七

渟足・磐舟柵 出羽柵

二 東山道支道 一八八

令制東山道 原初の東山道支道

白鳥の史的環境 斑尾山麓の道

第三節 『和名類聚抄』にみる郷と

信濃の蝦夷……………一九二

神戸郷の存在 信濃蝦夷と葛木犬養神

第四節 人びとの生産業……………一九六

信濃の特産物 牧の存在

第二編 中世……………一九九

あらまし

第一章 武家政権のはじまり……………二〇三

第一節 牧と莊園の発達……………二〇三

一 古代郷から中世郷へ……………二〇三

「郷」とはなにか 水内・高井地方の古代郷

中世郷の出現

二 常岩御牧の成立……………二〇五

年貢未納の牧 常岩牧の開発者

常岩牧の耕地化 常岩牧の領域

郷から莊園へ 若槻莊の伝領 本莊と新莊
小菅莊の存在 小菅莊と小菅神社

第二節 武家政権のあゆみ……………二一四

一 源平の争いと在地武士……………二一四

義仲の出生 駒王丸から義仲へ

保元の乱と志津間氏 平治の乱と信濃

平氏政権と信濃

反平氏の動き

木曾義仲の挙兵

横田河原の戦いと飯山地方

北陸道の戦いと義仲の入京

義仲の没落

二 鎌倉幕府の成立と比企事件……………二二三

鎌倉幕府の成立と信濃武士 鎌倉幕府の信濃支配

將軍頼家と近習

比企一族の滅亡

中野能成の処罰 連続する事件

泉親平の陰謀

三 承久の乱と飯山地方……………二三〇

乱のきっかけ

三手の軍

幕府軍の勝利と乱の処置

四 巢鷹山の紛争……………二三三

知行国と信濃 藤原定家と北条氏と信濃

巢鷹山をめぐる争い 中野能成の訴え

第二章 飯山地方の土豪……………二三六

第一節 内乱の時代と飯山地方の土豪 二三六

一 北信濃の御家人 二三六

飯山地方の御家人 中野氏から市河氏へ

常岩宗家の立場 高梨氏の与党衆

泉氏系土豪の検討 泉氏の伝承とその検証

二 中先代の乱と飯山地方 二三八

鎌倉幕府の滅亡 市河一族の動向

市河氏の転戦と常岩氏 中先代の乱と市河氏

三 観応の擾乱と飯山地方 二四〇

南北朝の内乱と市河氏

兵糧料所と市河氏 小菅・平林合戦

観応の擾乱と北信濃の武士 二四二

兵糧料所と志久見郷 飯山地方の兵糧料所

泉氏の虚像 泉氏の実像

第二節 大塔合戦とその後 二四五

一 守護小笠原氏の入部と在地武士 二四五

南北朝合一と地方の混乱

新守護小笠原長秀と市河氏

二 大塔合戦 二四七

国人の反発と郷土武士 合戦後の状況

三 高梨氏の進出 二四九

四 岳北地方の土豪 二五二

高梨左馬助の反乱 高梨氏の中野進出
高梨氏の出自と所領

第三章 上杉氏と飯山 二六一

第一節 上杉、武田氏の争い 二六一

一 長尾景虎と外様衆

武田氏の信濃侵略 高梨氏と奥信濃土豪の動向

外様衆の対応

二 武田氏の北信濃侵攻と長尾氏の反撃 二六三

市川氏武田方となる 景虎、飯山に軍を移す

三 両軍川中島に戦う 二六五

信玄、龜藏城の自落を祈る 川中島合戦

四 決戦後の飯山城 二六八

上倉氏ら飯山口の守備に失敗する

輝虎、飯山城を築く 信玄、飯山城を攻める

市川氏河東に新城を築く

甲越戦争による郷土の荒廃

第二節 上杉氏の支配

二七六

一 御館の乱と飯山

二七六

上杉家の相統争い

武田勝頼の飯山支配

二 武田・織田氏の滅亡と飯山

二八〇

川中島地方森長可領となる

三 上杉景勝領の飯山

二八一

岩井信能飯山城代となる

岩井信能の町作り

上杉景勝の会津移封

会津から米沢へ

四 上杉氏の移封と郷土

二八八

上杉領の飯山と周辺の動向

第四章 飯山地方の生活と文化

二九一

第一節 人びとのくらし

二九一

一 人びとの往来と物の流れ

二九一

飯山盆地の道路網 千曲川沿いの道(谷筋道)

斑尾山麓の古道 富倉峠・平丸峠・小沢峠道

大明神峠・ひるこ峠 須川峠・伏野峠 過所

運はれてきた珠洲焼系陶器 各種の陶磁器と土器

渡来銭

二 城館と集落

三〇七

静間館とその周辺
中条城と周辺集落
吉の城山(岩井城)

山口城 柏尾館 大飼館と犬飼城 飯山城

第二節 諏訪神社の信仰と在地武士

三三六

一 建御名方富命彦神別神社

三三六

延喜式の諏訪社 五束大宮の草創

一 建御名方富命彦神別神社

三三六

二 諏訪社と武士団

三三九

二 諏訪信 仰

三三九

三 諏訪社と武士団

三三九

三 諏訪社の造宮と御柱

三四〇

三 諏訪社の造宮

三四〇

三 諏訪社下社の造宮

三四〇

三 諏訪社下社の祭事

三四〇

第三節 八幡社と神祇信仰

三四三

一 飯笠山神社

三四三

一 飯笠山の由来

三四三

二 若宮八幡神社

三四五

二 泉氏と大境氏

三四五

三 白山神社

三四六

三 交通の要地桑名川

三四六

四 木島神社

三四六

安田郷は高梨領 綱取より綱切へ
飯糰神の信仰

五 伊勢社 三四八

農作と水害守護の神

一 城館と集落遺跡 三六二
金沢遺跡 長者清水遺跡 大倉崎館跡

第四節 仏教の展開 三四九

二 建造物 三七〇
数少ない中世建築 白山神社本殿

一 浄土真宗のあゆみ 三四九
浄土真宗寺院おこる 真宗寺の布教

健御名方富命彦神別神社末社若宮八幡神社本殿

小菅神社奥社本殿

大坪真宗寺 勝願寺 西敬寺

二 禅宗の展開 三五三

第三編 近世 三七九
あらまし

第五節 小菅神社の成立と移り変わり 三五六

一 小菅権現社の起こりと熊野社 三五六

小菅権現社の草創 熊野社の信仰

第一章 飯山藩と幕府領の成立 三八三
第一節 統一政権の成立と飯山地方 三八三

一 豊臣政権の支配 三八三
関一政の飯山入封と太閤蔵入地 太閤検地の施行

二 森忠政の施政と検地 三八五
森忠政の入封 右近検地

小菅山の修驗 元隆寺の規模

三 松平忠輝と付庸大名皆川広照 三八九
争乱に明け暮れる 近世の小菅社

四 小菅山の移り変わり 三六〇
争乱に明け暮れる 近世の小菅社

争乱に明け暮れる 近世の小菅社

松平忠輝と皆川広照の入封 大久保長安の領政
忠輝の改易

第二節 飯山藩の形成と幕府領	三九三	二 檢地の農民階層と百姓身分	四三一
一 飯山藩の成立	三九三	桑名川村の農民階層と百姓身分	桑名川村の検地
堀直寄の入封と治政 佐久間氏三代の支配	三九三	下木島村の農民階層	新田検地と新屋敷の登録
二 飯山藩政の確立	三九八	第三節 年貢・諸役と村	四三七
松平忠俱の入封と治政 永井氏の支配	四〇八	一 家並百姓から本百姓へ	四三七
青山氏の支配		家並百姓と農民階層 本百姓と柄在家	
三 幕府領の成立と岩城領		二 飯山藩の年貢・諸役	四四二
忠輝以後の諸領と幕府領 岩城領の存廃		年貢皆済前の穀物一切出し申すまじき事	
第二章 町と村の成立	四一三	年貢割付状 遠払いご免願い	
第一節 城下町飯山の成立	四一三	小物成の代銀納化 年貢・諸役の軽減願い	
一 飯山諸町のなりたち	四一三		
二 城下町の諸商人	四二一		
三町から五町へ 松平時代の城下町	四二一		
元禄ごろの商人 元禄以後の商い	四二八		
第二節 飯山藩の検地と百姓身分	四二八		
一 飯山藩の領内総検地	一		
第三節 年貢・諸役と村	四三七		
一 家並百姓から本百姓へ	四三七		
家並百姓と農民階層 本百姓と柄在家			
二 飯山藩の年貢・諸役	四四二		
年貢皆済前の穀物一切出し申すまじき事			
年貢割付状 遠払いご免願い			
小物成の代銀納化 年貢・諸役の軽減願い			
第四節 近世前期の農民生活	四五〇		
一 新田開発と新田村落	四五〇		
堀直寄の新田開発 松平氏の新田開発			
戸狩新田の開発 北原新田の開発			
福島新田の開発			
二 農作業と作物・肥料	四五九		
農業を専らに心掛けよ			
宮本家の「仕廻帳」 ご法度になつた焼畑			

三 入会山論と百姓持山

四六八

入会山と村の生活 百姓割山

国絵図作成と信越国境山論

蓮村と永江村の入会権と境界争い

水源地の山論

入会権

四 部落の成立

四七六

「かわた」から「えた」へ

城下に配された「えた」「えた」の職務と生活

安永・文化期の御用金御免一揆

藩財政と御用金 安永二年の惣百姓一揆

第三章 本多氏飯山藩政と農民

四八五

第一節 本多氏の支配

四八五

一 入封と替え地

四八五

本多氏の入封 村替え

二 藩制と家臣団

四八九

領主と幕府 職制と家臣団

三 領内支配

四九一

法度とお触れ 領内区分と代官 庄屋と組頭

四 年貢と課役

四九四

本多氏の年貢と農民 使役と雜税

遠払いと先納金 江戸回米

第二節 箱訴と一揆

五一

一 享保・宝曆期の山論と箱訴

山野の利用と山論 享保の大川村の山論

大川村の箱訴 農民の結束と藩の困惑

元文の惣百姓訴訟 宝曆の瀬木村山論

惣百姓箱訴

四 部落の成立

四七六

二 安永・文化期の御用金御免一揆

五七

藩財政と御用金 安永二年の惣百姓一揆

文化元年の川辺・山ノ内百姓一揆

文化二年の外様組騒動

第四章 幕府領の石代納と安永騒動

五三〇

第一節 幕府領の石代納

五三〇

一 石代納のなりたちと定着

五三〇

幕府領の設置と石代納 寛永年間の石代納

寛永年間の石代納 石代納の実際

二 石代納のしくみ

五四一

定免制と租率の引き上げ 石代納の実際

石代値段の引き下げ要求 石代納の実際

支配替えと年貢金上納 二分納の実現

第二節 安永中野騷動

江戸差立てと繼送り 石代値段の決定

五五三

- 一 年貢上納仕法改革への抵抗 五五三

騷動のあらまし 江戸回米の申し渡し

皆済期月の繰り上げ

- 二 一揆の様相 五五八

村内部の動きと騷動の発端

『騷動記』と騷動の経過

飯山藩の対応

頭取の探さくと吟味 明暗を分けた支配下の村々

供養と義民伝承

- 三 幕府領の安永新田検地 五七四

一揆のあと的新田検地 隠田の摘発

検地役人の逗留

- 四 幕府の安永新田検地 五七八

隠田の摘発

- 第五章 産業の発達と村の近代化 五八一

第一節 農業と諸産業の発達

五八一

- 一 農法の発達と商品作物 五八一

人口の推移 諸村の人口推移 田畠の構成

農業生産の様相 稲作の変化 肥料

農具の普及と改良 農馬の普及 農間余業

田畠所持の変動 幕末期における農家の一年

第三節 村と農民の変化

六二七

一 豪農と貧農

六二七

貨幣経済と副業経営

地主と副業経営 地主の肥大

小作人の増加

二 江戸稼ぎと諸稼ぎ

六三八

江戸冬奉公 領主側の対応

近郷近在への奉公稼ぎ

第二節 山と水をめぐる変化

六〇一

一 続発する水害

六〇一

水害の実態

寛保の大洪水 川欠けと地境争論

二 水をもとめて

六一七

小境三組と桂池 新規堀貫普請と中古池堀普請

善光寺地震と桂池の普請

もらい水と船久保新堤普請

用水利用の村約束

もらい水と水論 中古池堀貫戻し普請

雪しろ水被害ともろもろの普請

雪しろ水被害ともろもろの普請

二 農村加工業としての内山紙 五九六

内山紙の特色 内山紙の生産

近世中期の内山紙生産 近世後期の紙漉き農家

問屋と内山紙の販売

三 村方役人と村の変化 六四三

村役人の輪番制 村入用帳の公開

四 部落の変化 村定めの成文化

差別の強化とえたの職務 六五〇

宗門人別帳と差別 きびしい生活制限

太刀取り役をめぐるたたかい 中野牢番役の改革

太刀取り役をめぐるたたかい 飯山牢番役の改革

第六章 飯山町と交通運輸の発展 六六七

第一節 飯山町の発展 六六七

一 諸商人の活躍 六六七

飯山城下町の変化 米の流通と穀商

塩・内山紙を商つた野田屋

多角経営の島田屋金四郎家

二 多い酒造家 六九〇

元禄・享保ころの酒造家 天明～文政期の酒造家

天保以降の酒造家

三 借家・店借の増加 六九五

借家数の増加 嘉永ごろの借家

第二節 街道と千曲川通船 六九八

一 谷街道と越後道 六九八

谷街道東通り 深坂峠と野々海峠

谷街道西通り 牧峠

峠道のいろいろ 関田峠

筒方峠・小沢峠・平丸峠 富倉街道

二 千曲川通船 七二七

通船の成立 太左衛門船の運用

三 渡し船 七三四

上船渡 下船渡 その他の渡し場

第七章 庶民文化と民間信仰 七四三

第一節 教育の広がりと文字社会 七四三

一 寺子屋・私塾と藩校 七四三

寺子屋の起こうり 寺子屋の教育

藩校長道館

二 学芸と地方文人 七五三

地方への文化移入 庶民文化

日々の楽しみ

三 文字社会のくらし 七六三

経済活動と文字 さまざまな記録

文字の活用

第二節 社寺と民間信仰

第八章 幕藩制の動搖と民衆

七六九

一 城下の形成と寺院の創立	七六九
二 檀家制度と庶民信仰の規制	七七九
三 正受庵と臨濟宗	七八四
四 神道信仰の高まり	七八四
五 修驗の活躍	八〇二
一 山伏の動向	和合院の台頭と奥筋山伏の抵抗
二 里山伏の生活	村にあった小堂社
第三節 社寺と庶民の建築	八一一
一 今に伝わる近世の匠	八一一
二 神社本殿の概要	各社殿にみられる特色
三 修驗遺構	寺院本堂の建築
四 雁木のある町並み	
第一節 飢饉と災害	八二四
一 さまざまな災害	八二四
二 天明の大飢饉	八二六
三 天保の飢饉	八三〇
四 統発する川除普請	八三四
五 飯山の火災	八四三
一 火災の発生	火災についての取り決め
二 出火時の処置と取り決め	火災後の相互扶助
六 善光寺地震	善光寺地震のあらまし
一 地震地帯飯山	
二 飯山藩の被害	犀川湛水の決壊による水害

幕府・飯山藩の救済策 大災害からの復興

善光寺地震の犠牲者供養碑

第二節 天保の飯山領一揆八六三

一 訴願と村方騒動の高まり八六三

北信濃の村方騒動 村方騒動の種々相

二 天保飯山騒動八六八

飯山騒動の経過 飯山藩の事後処置

騒動の吟味と处罚

第三節 開港と幕末の動乱八七八

一 開港後の経済と物価高騰八七八

黒船来航と奥信濃の情勢

物価高騰と庶民のくらし

二 幕末の政局と民衆八八六

和田宿助郷 北国街道筋への助郷 兵賦と農民

悪党横行の世情